パッションと長靴で野村に夢を

愛媛県立野村高等学校 畜産科　3年　友松 瑠生

「パッションと長靴さえあれば酪農はできる」。ニュージーランドで出会った女性酪農家の言葉です。この一言が、私の見る酪農の夢の背中を強く押してくれました。

昨年の夏、私は全国から集まった農業高校の女子生徒と一緒に、ニュージーランドで10日間の酪農研修を受ける機会に恵まれました。研修のテーマは「女性の活躍」です。これは日本では、今後農業、特に畜産業において、女性が経営者やリーダーとして活躍する可能性や必要性が十分にあるということを意味しています。

そして、実際私の目にしたニュージーランドは、日本に比べて遙かに男女の性差にこだわらない社会づくりが進んでいました。現在首相として国の政治を動かしているのはアーダーン首相、40歳の女性です。酪農については、ニュージーランドの酪農経営者の半数が女性です。一方の日本は、わずか3％弱。酪農従事者の半数が女性であるにもかかわらず、その経営のほとんどが男性の手によるものとなっています。この違いは何なのか、私は10日の間に自分の目で確かめようと思いました。

そして現地での農場や企業の訪問、農家でのホームステイなどを通して私なりに考えたことを整理した結果、2つのことが見えてきました。

1つ目は女性自身の意識のもち方です。競争心が強いニュージーランドの女性は「男ができるなら女もできる」という思いで様々な仕事や役割に積極的に挑戦しています。家族でオーガニックファームを経営するレイチェルさんは、会社の代表を務めています。夫ではなく自分が代表を務めることについて「私が経営する方がうまく行くから代表を務めているだけ。適材適所よ。」と笑っていました。確かに言われてみると酪農に関して女性には多くの強みがあります。女性全般の傾向として、母性から生じるきめ細やかな心遣いができることが産前産後の母牛、生まれた子牛の世話に向いていること。注意深く慎重であるので農業機械等の操作に向いていること。時間を有効に使うことが得意であるので、家事と仕事の両立が可能となり、その安定した気持ちが生産性の向上につながること…。そう考えるとニュージーランドの実態は当たり前のことが当たり前に通っているだけで驚くことではありません。レイチェルさんの他に何人もの酪農経営に携わる女性に会いました。どの女性も自分の仕事に誇りをもっていて、自信に満ち溢れていました。その姿を私は美しいと感じると同時に、不思議な感動を覚えました。

2つ目は、社会全体の中で仕事としての「畜産業」に対するイメージが日本とニュージーランドでは大きく違うことです。日本で畜産業へのイメージと言えば3K。くさい、きたない、きつい。このようなマイナスなイメージが先に立ってしまうことが事実です。ところがニュージーランドでは、全く違います。現地の女子高生に畜産業のイメージについて尋ねてみると「牛ってかわいいよね」

「酪農家さんはかっこいい」など、日本のようなマイナスなイメージでは全くありませんでした。そして、日本での酪農３Kについて女性経営者に投げかけてみると、彼女はしばらく黙って考えた後、私の顔を見ながら「ここでは放牧だから臭わないし、衛生環境に配慮しているから綺麗。何より酪農はやりがいのあるライフスタイルの一つとして認められている。私は楽しい。それが一番じゃないのか。あなた自身は日本でそういったように酪農が思われていることについてどう思うのか。それでいいのか。」とゆっくりはっきり分かりやすく話してくれました。そして、その時私は、自分自身が日本の酪農が抱える問題の当事者であることに気が付いたのです。

私の手元に１枚の写真があります。ソフトクリームを手に、満面の笑顔で走り出している２歳の私です。この写真は、今私が住んでいる町にある小さな観光牧場での1枚です。臆することなく、草を食んでいる大きなヤギに近付き、その顔を撫でようとする私に家族は大変驚いたそうです。私の夢は間違いなくここから始まりました。家族と離れ、あの観光牧場のあった町のたった１つの高校。愛媛県立野村高校畜産科で学んで１年半。ニュージーランド研修を目の前にした1年前の私には「この野村町に丸１日過ごせる観光牧場を作る」という酪農の夢が見えてきたところでした。

ちょうどその1年前、野村の町は「西日本豪雨災害」に襲われました。「強い雨がずっと降っている」その位の認識しかしていなかった私には、そのときのことは今でも悪い夢を見ていたかのように思えます。そしてその日の夕方、停電してしまった学校で、私は初めて自分の手で学校の乳牛の搾乳をしたのです。皮肉なことですが、それは私にとって一生忘れられない感動的な体験でした。その後一ヶ月と経たない中で営業を再開したあの観光牧場を訪れた私は、駐車場に積まれたままの大量の災害廃棄物を目にして胸がつぶされそうになりました。「地域に明るい話題を」という思いでの再開だったといいます。流れ込んだ土砂で荒れ果てた施設の一角での営業再開。でもその時、私の「ここで、この町で」という夢がはっきりと見えてきたのです。

畜産加工品や農作物の販売、観光、それぞれが利益を生み出しながら、人々に自然と関わることの楽しさを味わってもらえるような場所。地元の新鮮な農産物が市価より安く手に入れることができるファーマーズマーケット。オリジナルブランドの酪農製品も並びます。素材にこだわった食事が提供されるレストラン。オリジナルスウィーツがあれば目玉になります。少し先には観光牧場。牛の放牧の様子を眺めながら歩いた先に体験施設があり、搾乳やチーズ作り、ピザ作り、バーベキューなどの体験もできます。小動物と触れ合うことのできるミニ動物園も併設されています。自然素材を使ったリースやろうそくなどの小物づくり、野の花を使ったフラワーアレンジメント、簡単な木工体験などができる工房もあるといいかもしれません。

ニュージーランドから帰って改めて考えてみるとこれらの夢には女性の力が欠かせないということに気付きました。女性が中心となってこの夢を実現させることこそが、日本の酪農の抱える問題の解決の一歩となるのではないのでしょうか。

もちろん実現することは簡単ではないことはわかっています。それまでの過程や困難さは今の私には想像さえ及びません。でも、豪雨災害後、二度と元のように戻らないと思っていた町の復興の様子は、私の想像を遙かに超えるものでした。地域の人々の強い意志と力を目の当たりにした私は、やってできないことはないということを確信しています。

夢を夢のままで終わらせないために私は今自分にできることを精一杯やっています。学校の勉強だけでなく、将来酪農家として必要とされるスキルを身に付けようと思い、昨年度には家畜人工授精師の資格を取りました。学校の牛舎での作業にも早朝から自主的に取り組んでいます。地域の酪農家を訪れて地域に合った酪農について教わることもあります。そしてやればやるほど酪農という仕事に惹かれるのです。

私の夢を育ててくれた高校生活も残り半年です。卒業後は、北海道の大学で畜産を学んでこの町に帰ってきたいと思っています。

「パッション」も「長靴」も準備万端です。今の私に見える畜産業の可能性。これを自分の手でしっかり探っていきたいと思っています。

ご本人による朗読を
こちらからお聴きになれます。